

## 感染性心内膜炎の予防について（口腔衛生に気を付けて）

感染性心内膜炎という病名はあまり聞き慣れないものかもしれませんが、文字通り心臓に細菌がついてしまう病気です。心臓に細菌がついたというだけで大きな病気だということは容易に想像がつくことと思います。細菌による感染症ですので抗菌薬による治療が行われますが内服薬では治すことができません。注射の抗菌薬による治療が必要です。ですから入院治療になります。しかも抗菌薬は4-6週間程度投与し続けることが必要ですので、前後の検査期間などを含めれば2ヶ月程度の入院になります。

2ヶ月間程度の入院が必要とはいえ、抗菌薬治療だけで良くなるのであればこれは不幸中の幸いです。感染性心内膜炎の怖いところは、感染した細菌が心臓の中をどんどん壊していくことです。重要な”弁”という組織が壊れると急激に弁の逆流が進行するので、急性心不全・ショックということが起こり得ます。心臓を動かす信号の通り道である伝導路が壊されれば重篤な不整脈が起きることもあります。ですから手術が必要になったり命に関わることも稀ではありません。

どうして心臓に細菌がついてしまうのでしょうか？体の表面に傷ができればそこから細菌が侵入して血液の流れに沿って心臓に到達します。小さな傷であれば一度に入ってくる菌の量は少ないので心臓に到達するまでに処理されてしまいますが、大きな傷で一度に多量の菌が入ってくると処理しきれずに一部が心臓まで到達することがあります。とは言っても心臓の表面は内皮細胞という細胞でコーティングされており、そう簡単に菌はつかないような構造になっています。しかし心臓の壁に穴が空いていたり弁の逆流があったりすると、そこでの正常ではない血流に心臓の表面が擦られてコーティングが剥がれてしまい菌が付きやすい状態になってしまいます。

どんな時に感染性心内膜炎になるのでしょうか。昔から言われているのは歯科処置の時です。口腔内は細菌だらけですから、例えば歯を抜いて大きな傷ができると多量に菌が入ってきます。他にも大きな傷を負った時には可能性があります。また小さな傷でも慢性的なものはリスクがあると言われていています。例えばアトピー性皮膚炎で痒くて常時引っかき傷がある方もリスクがあります。

感染性心内膜炎は良くて2ヶ月程度の入院、悪ければ手術、命に関わることもあるという重い病気なので、ならないように予防することが重要になります。予防の方法は処置（抜歯など）の前に抗菌薬を内服するという方法です。その結果、処置で菌が血液の中に入ってくる時に血液中に十分な抗菌薬が存在するので感染の成立を阻止することができます。ですからけがなどあらかじめ予防できない場合には仕方ありませんが、医療処置の場合は予防が可能ですので処置の前に感染性心内膜炎のリスクがある病気であることをお話ししておくのは重要なことです。また口腔内衛生に気をつけることやアトピー性皮膚炎の治療をきちんとするなど、罹患するリスクをできるだけ減らすことも重要です。

この抗菌薬による予防は米国心臓病協会により1955年から推奨されておりましたが、明確な根拠はありませんでした。そのためあって2007年からは非常に限定された患者さんにのみ予防が行われるようにガイドラインが改定され、ヨーロッパ各国も追従しました。日本ではこの改定の前に全国調査が行われて、その結果を踏まえて予防を継続する方向となりました。最近、欧米でこの予防を限定したことにより、実は予防投薬が有効だったということを証明する報告が出てきています。ただし医療経済的には予防することが必ずしも妥当ではないということで欧米では非常に限定された患者さんにのみ予防を行うという方針は変わっていません。

あなたあるいはあなたのお子さんが感染性心内膜炎の予防が必要か否か、主治医の先生に確かめておきましょう。そして可能であれば処置の必要性に関わらず歯医者さんに定期的に通って口腔内の管理をお願いするのが良いでしょう。